

3・11に向き合つた詩人たち

中原 豊

現在勤務している職場（中原中也記念館）を通じて中原中也賞受賞诗人を中心とする現代詩人と持続的に交流している。そこで得た知見に基づいて、和合亮一、辺見庸、三角みづ紀、須藤洋平という四人の詩人の、東日本大震災以後の作品や活動の一端をご紹介したい。

*

まずは、これらの幅広い活動の起点となつた表現に注目してみたい。それは、同じ三月一六日午前四時三〇分の日付をもつ、〈行き着くところは涙しかありません。私は作品を修羅のように書きたいと思います。〉と〈放射能が降つています。静かな夜です。〉の二つのツイートである。

前者は宮沢賢治の詩「春と修羅」をふまえていることは明らかだが、後者についても和合自身がエッセイ「風が吹く限り」（「中原中也研究」16 二〇一一年八月 中原中也記念館）の中で次のように語つている。

あゝ、しづかだしづかた。……

福島市在住の和合亮一が震災五日後の二〇一一年三月一六日にツイッターを通じて発信を始めた「詩の礫」は、多くのフォロワーを獲得するとともに繰り返しリツイートされ、大きな反響を呼んだ。一連の発信は『詩の礫』（二〇一一年六月 徳間書店）『詩ノ默礼』（同 新潮社）『詩の邂逅』（同 朝日新聞出版）以下の詩集として刊行され、出版メディアに移されるとともに、和合が精力的に続いている朗読、講演、ワークショップなどと相まって、東日本大震災以降の詩人の活動を代表するものとして広く知られている。

放射能が降つています、静かな夜です。

この一行から私は、震災にまつわる短い詩の断片を夥しく書き続けることになるのだが、始まりは正しく心の中の中也

が呟いたものだつた。

ここで和合が想起しているのは中原中也の詩「春」（詩集『在りし日の歌』所収）である。

あゝ、しづかだしづかだ。

めぐり来た、これが今年の私の春だ。

むかし私の胸搏つた希望は今日を、

厳めしい紺青となつて空から私に降りかかる。（第二連）

また、一〇一三年一月一九日に行われたトークライブ「ことば」を通じて福島と向き合う（於 山口情報芸術センター）において

筆者が和合に指摘したことだが（中原中也記念館館報 第18号

一〇一三年三月 中原中也記念館）、このツイートは同じ中也の詩「冬の夜」（詩集『在りし日の歌』所収）の次のような表現とも響き合つてゐる。

みなさん今夜は静かです

葉籠の音がしてゐます

僕は女を想つてゐる

僕には女がないのです（第一連）

賢治や中也の表現に触発された先の二つのツイートは以後何度も繰り返され、「詩の礫」と題された一連のツイートを牽引する役割を果たしていく。内容的には震災や震災後の状況とほぼ無関

係といえる先行作品の詩句が、和合を新たな表現へと促したことを見逃せない事実である。先のエッセイ「風が吹く限り」において和合は述べる。

余震と放射能。不意にあふれてくる涙や恐れを封印せずに描き、そのまま後世に手渡すことが出来ないものか。感情の本分を刻むには、どうすれば良いのかを真剣に考え始めた。数多くの行方不明者の影を感じたり、避難者たちの姿を認めたりしているうちに、締め切つた窓の内側で私が追つたのは、中也の詩にある感情の真顔のようなものであつた。どうすればこのようにも「悲しさ」と「恐ろしさ」を、このまま伝えられるのか。この心の崖を、どう語れば良いのか。

ここにいう〈感情の本分〉〈感情の真顔のようなもの〉は、詩の言葉にこめられた感情の真実性というような意味合いで受けとめることができるが、文脈をたどつていけば、そうした内容的な側面にとどまつてはいないことがわかる。いわゆる「言葉を失う」ような限界状況の中でなお言葉を発しようとする時に、その契機として呼び出されたものなのである。和合は続く「詩ノ默礼」と題された一連のツイート（詩集『詩ノ默礼』所収）でも賢治の詩「生徒諸君に寄せる」をたびたび引用しているが、こうした先行作品の言葉を震災後の状況の中に置いて新たな発想や表現を導き出そうとする方法は、『廃炉詩篇』（一〇一三年六月 思潮社）まで続く和合の表現のひとつ特徴をなしている。

震災後の状況の中に先行作品の表現が呼び出される例は、被災

地に身を置きながら表現を続けた和合ばかりでなく、宮城県石巻

市出身で詩集『眼の海』(二〇一一年一二月 每日新聞社) エッセイ集『死と滅亡のパンセ』(二〇一二年四月 每日新聞社) などで震災をモチーフとした作品を発表し続いている作家・辺見庸にもある。遠隔地にあって報道等を通じてその状況を遠望していた辺見は、エッセイ「無限の前に腕を振る」(『死と滅亡のパンセ』所収)の中で、中也の詩「盲目の秋」について次のように述べている。

故郷を襲つた黒い大津波の映像をはじめて眼にしたとき、こんなことばがからだの奥ふかくから自然にわいてきまし

た。
「風が立ち、浪が騒ぎ、／無限の前に腕を振る。／その間、小さな紅の花が見えはするが、／それもやがては潰れてしまふ。／風が立ち、浪が騒ぎ、／無限のまへに腕を振る。」

もちろん、これはわたしの詩ではなく、津波をうたつた詩でもありません。中也が失恋の苦しみをうたつた、あまりにも有名な「盲目の秋」です。しかしながら、大津波にこれ以上ふさわしい詩の表現をわたしは知りません。なぜでしようか。なぜなのでしょうか。そのわけをかんがえつつ、わたしは詩作をつづけております。「無限の前に腕を振る」ように。

同じエッセイに辺見自身の詩「眼のおくの海——きたるべきことば」(『眼の海』所収)が紹介されているが、そこに直接「盲目の秋」の表現が用いられているわけではない。しかし、先行作品の詩句が新たな表現の模索の重大な契機となつている点は和合と

同様である。

ここで和合や辺見が先行作品から受けとめているものは、まず第一に、周囲の状況や自己の心情に向ける眼差しの強度や深度のようないのではないだろうか。それは詩人の中で感情や思考が働く際のひとつつの型として機能する。またそれと同時に、その言葉がまったく異なる状況の中に呼び出され、それが持つているイメージや意味が根底から組み換えられることによって、新たな表現を生み出したが、もちろんそれは直ちに生まれてくるものではない。長い歴史性をもつたイメージや意味が組み替えられて新たな表現に到達するためには、それに応じた長い時間が必要とされるはずである。それは和合や辺見のような作者だけに言えることではなく、その表現を受けとめる読者においても同様であろう。

震災後の和合の活動についてもう一点ほど指摘しておきたい。その特徴は、とりわけその出発点において、ツイッターというメディアを通じ読者との間に空間的な隔たりを超えた同時性を獲得していた点にある。

和合のツイートは発信とほぼ同時にフォロワーに受信される。受信したフォロワーはそれをリツイートすることによって発信という行為に参加する。ツイートには日付と時刻が刻印されており、遅れて受信した人々もリアルタイムに近い感覚でそれを受けとめ、さらにリツイートすることでやはり発信に参加していくわけである。また、リツイートに自分の言葉を添えることも可能で、リプライというかたちで和合に向けて自分の言葉を発信することもできる。こうして刻々と関連ツイートが流れしていくタイムライ

ンは、被災地と非被災地の隔たりを越えて、リアルタイムに近い感覚で受信と発信とが交錯する場となる。

ツイッターを起点とし、和合の活動は、放送や出版といった従来のメディアから、肉声による朗読をはじめとする講演、ワークショップといった直接的なコミュニケーションをともなう場にまで広がつていった。こうした点が関東大震災や原爆といった近代のカタストロフィーの後に生まれた文学と決定的に異なつている。

震災後の文学を論ずるにあたつて頻繁に引用される「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である。」というアドルノの言葉に照らしていえば、和合の活動はまさしく〈野蛮〉な行いと言えるだろう。しかしながら、和合の活動はメディアが発達し多様化した現代文明のあり方に深く根ざしていると同時に、生まれ故郷であり生活の場である福島の現状に正面から向き合い、学生時代の演劇や教員としての仕事を通じて培われた自らの資質に根ざして展開されている。それは言わば確信的な〈野蛮〉であり、それが多くの人々の支持を受けている事実も看過できない。和合の活動は、〈アウシュヴィッツ以後〉とは異なる東日本大震災後の日本の状況の中で、アドルノの言葉やそれをテーマとする批評を逆照射しているともいえるのではないだろうか。

*

宮城県南三陸町在住でトウレット症候群という難病と闘いながら生活を続いている詩人・須藤洋平は、通院のため訪れた仙台市で被災し、一週間近い避難所生活の後に帰宅して家族と再会した。

第一詩集『みちのく鉄砲店』（二〇〇六年九月私家版）以来沈黙していた須藤は、その体験をきっかけにして再び詩作に向かい、詩集『あなたが最期の最期まで生きようと、むき出しで立ち向かつたから』（二〇一一年二月河出書房新社）を出版した。

岩礁

なぜ生き残ったかなんて、私に知るすべはない。

死んでいった者たちと自分との間に、

明瞭な境界線などどうやつて引けるものか

頭脳で追いつくものなら、吐瀉物だつて語りだすだろう

そうしてまた遺体があがる

顔は溶け、髪は抜け落ちブラジャーだけをつけていたという

「ばらばらでねくていたな」

漁師たちが口々に言い煙草をふかした

死につけられた私の想いはどこまでもふちどられ
もがきながらつかんだ奇跡は

死んだ者たちさえ一緒に隠そうとしている
爪の先まで悲しみのつまつた身体でからめとるリアルに

罪の意識は永遠に続くだろう

けれど、

波が引いて行つたあと、
むき出された岩礁のたまりに

なにか息づいているかも知れない

そしてその水はきっと、塩からいだろう

同詩集に収録された「岩礁」は、震災の死者に対する哀悼とともに、自らが生き残ったことに対する深い罪悪感が色濃い。だがその一方で、多くの命を飲み込んだ海から新しい何かが生まれてくる可能性を見いだそうともしている。

ここまで流れは多くの人に受け入れやすいストーリーをもつている。しかしながら須藤は、震災の二年後に交わされた詩人・

三角みづ紀との往復書簡（『世界に投函する 須藤洋平×三角みづ紀

×荒谷良一 往復書簡』二〇一三・一一 株式会社マイナビ）の中で、（しばらくの間、詩など書けなかつた。これだけの人が／亡くなつて、近親の者たちを亡くして、詩など書けない。／何か依頼がきた時は、あらかじめ、頭にあつたフレーズを／震災用にアレンジしただけだつた。）（十二、九月十二日 宮城）と言う。こうして震災直後の自らの作品を否定し、改めて震災直後の体験の詳細や、不眠、幻聴、勃起不全といった症状に悩まされる自己の現状を三角に語るのである。

埼玉県在住で、震災直後の須藤を物心両面で支援した三角もまた、膠原病と闘いながら詩作を続けていた詩人である。往復書簡の冒頭近く、（トウレットがない身体つてどんなんどうう？／みづ紀さんは考えない？／障がいのない自分のことを。僕はどんなに開き直つても、いつも／考えてしまふよ。）（二、八月二十五日 宮城）と語りかける須藤に対し、三角は（障害のない自分のことと、そりや、考えてしまう。／もう海水浴も、全力疾走もできない。／発症した二十歳のときに戦場カメラマンの夢もあきらめてしまつた。）（三、八月二十九日 埼玉）と応える。病によつて内か

ら生存を脅かされ続けていたふたりの詩人は、そのことによつて深い連帯感をもつてゐる。震災をモチーフにした詩を書き続ける須藤に対し、（3.11）という呼び方が、数字として、記号として、意味を損ないそつて、口に出せない。（二十三、九月二十四日 リュブリヤナ）と語る三角の詩に震災の直接の影はない。しかし、三角は（須藤くんからの、手紙を読んで、／背中の中心にまつすぐ、汗をかきました。／続き、待つています。）（十八、九月十九日 埼玉）と聴き手に徹して須藤の言葉を受けとめる。

須藤は身体的な不調に苦しみ、ヨーロッパへ旅立つた三角と南三陸の自宅を動けない自分との隔たりを嘆きながらも、（もう本当、仰向けてに膚げられて。／それでも少しずつ、／書き始めた。／／詩つてはおののき、詩つてはおののき、時になじり、／転がり落ちてゆくよう。／／今はまた書けないような状態だけ。／／そして、この静かな海に向かつて、／僕はメシを食らう。／今、一時半になるところ。／／今夜もまた、マグカップで酒をのんでいるよ。）（十二、九月十二日 宮城）というように、行きつ戻りつしながら詩作に向かつていく。そんな須藤に対して三角は、リトアニアの詩祭の現場から（わたしたち、ぎりぎりのところで生きていて、／人間としては難しくても詩人として生きているならば、／それで、もう、幸福だと考えたからです。／／ハガキと詩集、届いてよかつた。／それは贈り物です。／わたしたちが詩を書くことも、贈り物。／わたしたち自身が贈り物で、／詩つて、言葉つて、いまここに存在していることつて、／（須藤くんは南三陸、わたしはドラスキニンカイ）／それが、すでに贈り物でした。）（三十、十月六日 ドラスキニンカイ）と語りかける。

ネットを通じて交わされた往復書簡は順次ネット上に公開され、帰国した三角が須藤を訪ねた場面の写真を巻末に配した電子書籍として発売された。ふたりの詩人のこうした活動もまたネット社会を基盤として成り立っている。須藤の地を這うような言葉との格闘も、三角の朗読を中心とするパフォーマンスと並行した旺盛な詩作も、アドルノの言葉を逆照射する力をもっているとともに、未だ途上にあるものであり、今後もその行方を注意深く見守る必要がある。

須藤が二〇一五年七月に刊行した詩集『真っ赤な傘突き刺して』（思潮社）には、『世界に投函する』で語られた内容と密接に関連する詩が散見される。三角に語った震災体験を直接のモチーフとした「サバイバルスキル」などもそうだが、「ケダモノ」の「身悶えながらも／メシを喰らう。／この静かなる海に向かつて。」のような詩句に、震災を経なければ生まれてこなかつた生のありようが刻印されている。

附記